

5月31日

## おとめ聖マリヤの訪問

*Visitation of the Virgin Mary*  
～マリア、エリサベトを訪ねる～



「聖母のエリサベツ訪問」

(Visitazione)

1528～29年

サン・ミケーレ聖堂

協会訳聖書でマリヤとなっていた人物名は新共同訳聖書ではマリアと表記されている。

この祝日は、教皇ウルバン 6 世により制定され、長く、7月2日に祝われてきたが、近代になって、5月が聖母マリアにささげられた月「花の月」として覚えられるようになり、今日の日に移された。

聖マリアのエリサベト訪問については、ルカによる福音書 1:39-56 において述べられている。訪問の前、天使ガブリエルは、おとめマリアに主イエスの誕生を予告するにあたり、マリアの親類であったエリサベトも、年をとり、不妊の女であったにもかかわらず、男の子をみごもっているという具体的事実をもって、神の全能を証明し、彼女を勇気づけた。このお告げを受けたマリアは、エリサベトに会うため、急いでユダの町にあるザカリアの家を訪ねる。マリアの住むナザレから、エルサレム南方のユダまでは、歩いて四日ほどもかかる山道で、少女の足には、かなりの労苦であったにちがいない。この間、どんな気持ちで歩いたのだろうか。額に汗をかきながらも、今まさに起こっている神様の不思議なみ業にどきどきしつつ、おさえきれない喜びに輝かんばかりの表情で、元気よく、急ぎ足で歩む姿が目には浮かぶ。

マリアの声を聞いたエリサベトは、聖霊に満たさ

れ、自分よりはるかに年下のマリアを祝福した。マリアのことを、女性のなかで最も祝福された方と言い、「わたしの主のお母様」と呼んだ。しかし、重要なことは、エリサベトがマリアを賛美し祝福した真の理由は、マリアを神格化したためではなく、何よりも彼女が、「主が語ったことは必ず実現すると信じた」からである。

エリサベトの祝福を受けたマリアは、謙遜な態度で、「身分の低い、この主のはしためにも」目を留められ、貧しいイスラエルの民を受け入れてくださる神の憐れみをたたえる賛歌、マグニフィカト（ラテン語：「神をあがめる」の意）を唱える。この賛歌にみられる、貧しい人々の友としての神は、ルカによる福音書のなかに一貫して取り上げられている重要なテーマとなっている。 (M)

<特禱>

全能の神よ、み恵みによって主の母マリヤはエリサベツを訪れ、共に喜び、あなたを賛美しました。どうかわたしたちにもみ恵みを注ぎ、わたしたちがみ子を救い主としてほめたたえ、主の兄弟、姉妹と呼ばれることを喜びをもって感謝することができますように、み子イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン